１２月例会レポート

　早いもので、１２月８日は今年の納め句会。初参加の方々を含め、総勢３８名で開催されました。
　句会受付では参加者全員に、１６ページ建ての「青きふるさと俳句大会・記念誌」が配布されました。これは１０月１２・１３の両日、長野県青木村にてにて開催された「青地巡礼第１回」の成果を纏めたもの。句会に先立つ挨拶の中で髙田主宰から、「記念誌の印刷費は、青木村の実行委員会がご負担くださいました」と紹介される。

　誌上巻頭には、地元実行委員長を務めて下さった松本淳英大法寺副住職の「はじめに」と高田主宰の「感謝」。続いて、ジョニー平塚さんの「青きふるさと俳句大会」レポート、地元の方々を対象に高田主宰の下で行われた「はじめての俳句教室」開催記（筆を執ったのは堀口知子さん）が置かれ、その後に８ページにわたる参加者の作品集。最後に中日新聞１０月２５日夕刊に掲載された俳句大会紹介記事で記念誌は締められている。
　巡礼のモットーである〈訪問させていただいた地元の方たちと共に句会を！〉が、このような形に具現化されたことに、会場から期せずして拍手が起こる。青地巡礼第２回は、すでに来年３月２３・２４日岐阜県大垣でと決まり、地元高校生との句会も予定されている。髙田主宰が記念誌でも述べておられる「風土に、歴史に挨拶するこころ」。大切にしたいと、あらためて思う。

　さて、納め句会。前半は参加者全員による互選と高得点句（今月は４点から９点）の合評、後半は主宰選（☆☆☆６句、☆☆７句、☆21 句）および講評と順調に進む。主宰講評では、時事的なとらえ方、リフレインの効果、写生する時の言葉の選び方など、実例が目の前にあるのでナルホドと思うことしきりである。
　例会ではいつも最後に、主宰が出席者全員の句を一つずつ取り上げて、添削のヒントを与えて下さる。特に写生句の場合、自分がいかに素直になれるか。「どれ、写生でもしてやるか」ではなく、向こうからどんな言葉が贈られてくるか、それを待つ…。作品の中に自分の立ち位置が定まらないことには、なかなか句には成り難い…。「分かってはいるけれ

ど」という部分をもう一度考え直す上でこうしてみてはという、そんなボールを投げて下さる。これは例会参加の大きなメリットである。
　参加者には、後日様々な添削例の記載された句会報がメールで送られて来るサービスがあるが、これも有難い。

　句会が終わるころにはとっぷりと日も暮れて、三々五々解散。
　皆さま、よいお年をお迎えください！　　（文責　安達潔）